

1. 酪農家戸数：たった5戸の酪農家が残っているだけ！

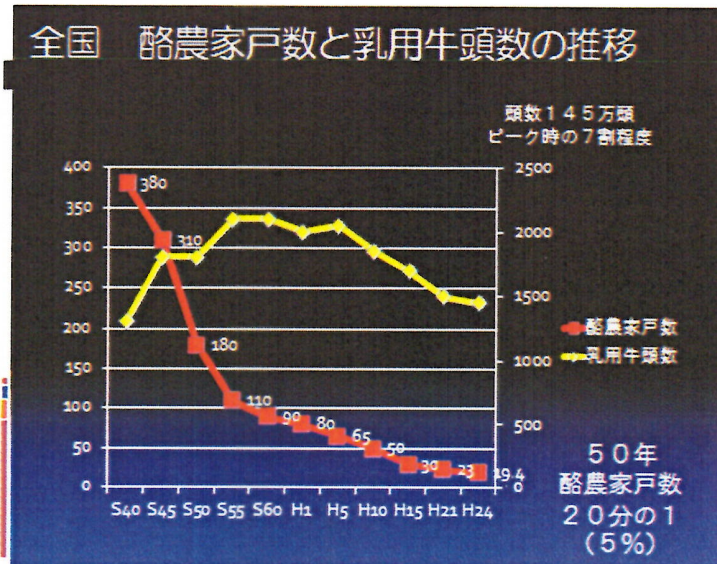


図1

図1は、もう何度も目にする酪農家の数の減少を示しています。50年前、全国の酪農家戸数は38万戸あったのですが、現在は1万9千戸程度まで減少したことを示しています。これは、単純に50年間で20分の1になったということです。これは、50年前の全国の酪農家戸数を100(戸)とすると今残っているのはたったの5戸になってしまったということです。たったの5戸です。府県の酪農家戸数の減少が特に顕著で、北海道ではこれほどまでに減ったイメージはわからないものの、現実の数字です。私がこの上春別の診療所に来た昭和57年ころは(33年前)、この上春別でも150戸以上の酪農家があったのですが、今はその半分にまで減っていることはやはり、驚くほどの減少です。今後もこの現象に歯止めがかかるとは思えないし、憂慮すべきことではありますが、同時に残った酪農家には、巨大なチャンスが訪れると思います。牛乳が足りないことやバターが足りないことは、現存の5戸の酪農家にとっては、全くの追い風意でしょう。TPPなどの問題はあっても、目の前の追い風には乗らなければなりません。すでに、大きなチャンスが到来していると思います。

2. それでも発情を見つけて種を付ける

発情発見率を上げて繁殖を改善する意味

農場の妊娠率を向上させるうえで、発情発見はそのキーストーン(かなめ石)です。VWP(自発的待機期間)をすぎた、初回授精はもちろん、どんなに、プログラム授精をとりいれても種付け後、最初の周期(18~24日目くらい)の再発情をどれだけ見つけ、

それを再授精に結びつけることができるのは、酪農家の発情発見努力に委ねられます。さもないと、繁殖検診での30数日妊鑑でマイナスと診断されてしまいます。そこから、PGを打って再授精を行っても、その種付け間隔は40日近いものになってしまいます。これが平均空胎日数を広げる最も大きな原因になっています。繁殖の良い農場の特徴の一つは、この種付け間隔が28~32日くらい(30日前後)と短いことが挙げられます。この発情発見のために有力なのが、万歩計のような牛の活動量を捕捉する装置です。初期投資にお金もかかりますが、この投資分はすぐに取り戻して余りあるものだと思います。今回は、心機一転万歩計を導入して10ヶ月、発情発見率向上を急速に改善させ農場の繁殖パフォーマンスを短期間に改善した例です。

A 農場の変化

	1 - 2年前	現在
頭数	231頭	260頭
平均空胎日数	155日	130日
初回種付け日数	95日	76日
種付け間隔	45日	31.3日
種付け回数(受胎率)	2.0-2.3(50-43%)	2.8(36%)
妊娠率	16-17%	19-20%
発情発見率	40%	58-60%

平均空胎日数が、25日も短縮しました。その大きな要因が2つあります。まず、初回種付け日数が19日短縮しています。もう一つが種付け間隔です。これも14日(2週間)短縮しました。受胎率は以前から2~2.3回前後を維持していました。しかし、これは積極的発情観察がなかったことから、極めて明確な発情だけに種付けをしていた結果で、受胎率はよいのに繁殖成績が今一つ振るわない典型的な例でした。後継者に引き継がれ、同時に万歩計の導入を始め、積極的な発情観察と授精(中には発情でないものも含まれる)によって受胎率そのものは低下しましたが、農場全体の繁殖パフォーマンスは、大きく向上しています。妊娠率も3~4%上昇し、以前のデータが入らない過去半年では24%にもなりました。過去における平均発情発見率が40-45%と低調でしたが現在は60%程まで上昇しそれを維持しています。

図1と図2を見てください。授精が何によって行われているかを示しています。図1が以前の発情発見が低調なときの状態を示しています。分娩後の初回授精までに時間がかかっていることと、自然発情での授精(青色)が極端に少ないことが分かります。そして搾乳日数が90日くらいから、やむなくプログラム授精などによって授精に積極的に介入を始めていることが分かります。一方で、万歩計を利用しながら積極的な発情発見と授精に取り組んだあとは、より早い時期から自然発情による授精が大部分を占めるようになっていくことが分かります。

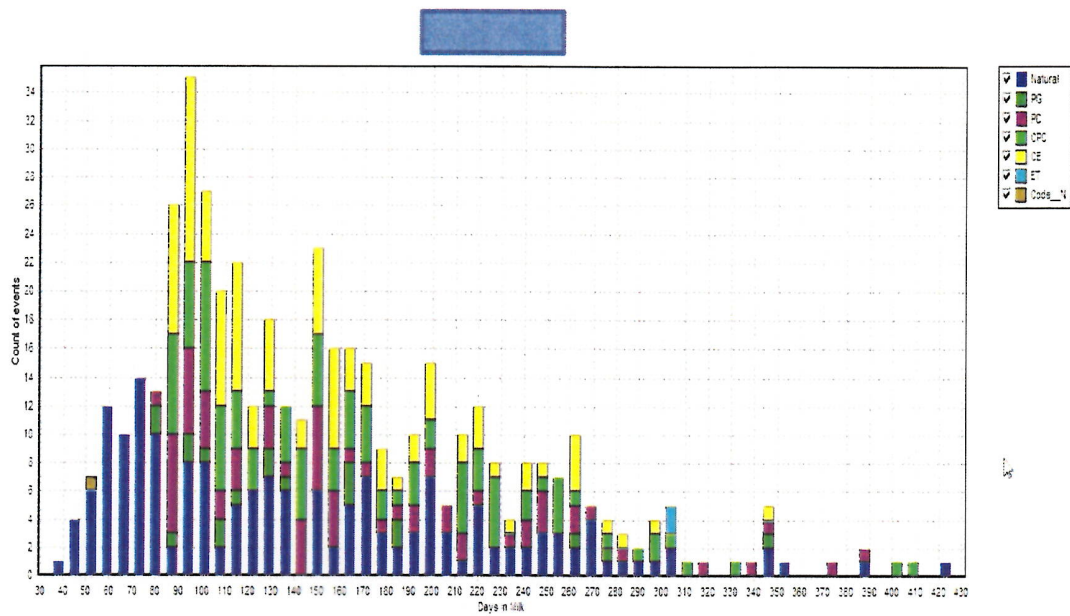


図 1 (搾乳日数と授精処置：青色が自然発情授精)

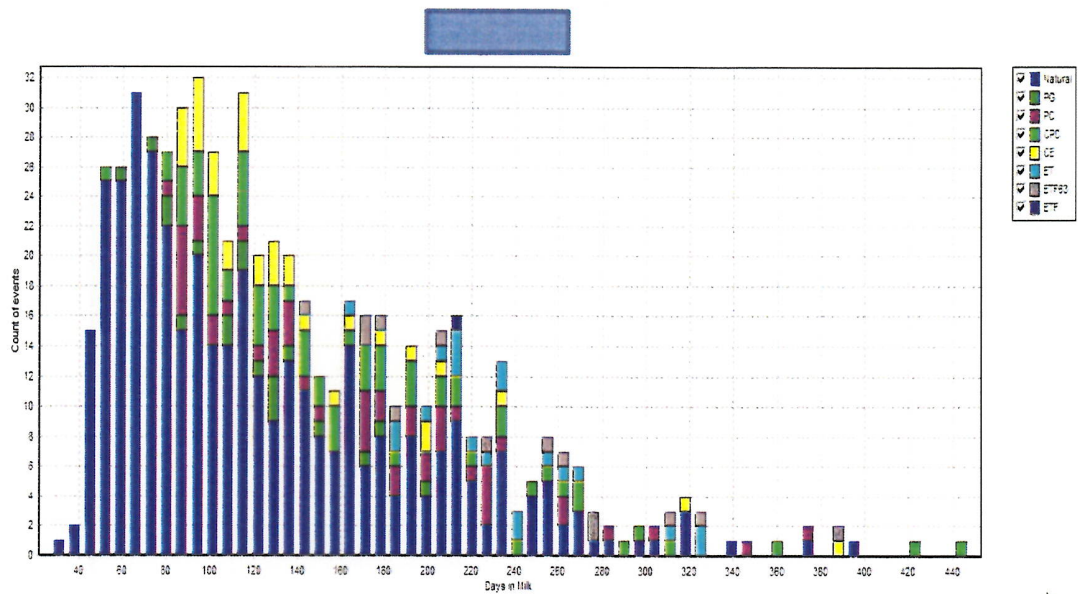


図 2

そして、プログラムなどによる授精への人工的（ホルモン剤）介入件数が極端に減っていることが分かります。同じ農場とは思えないほどの変化ですね。

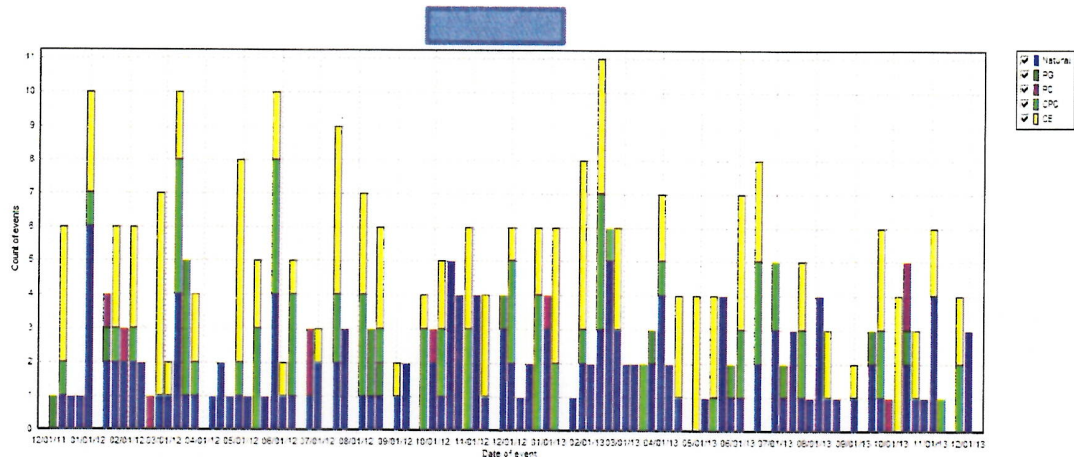


図3の1

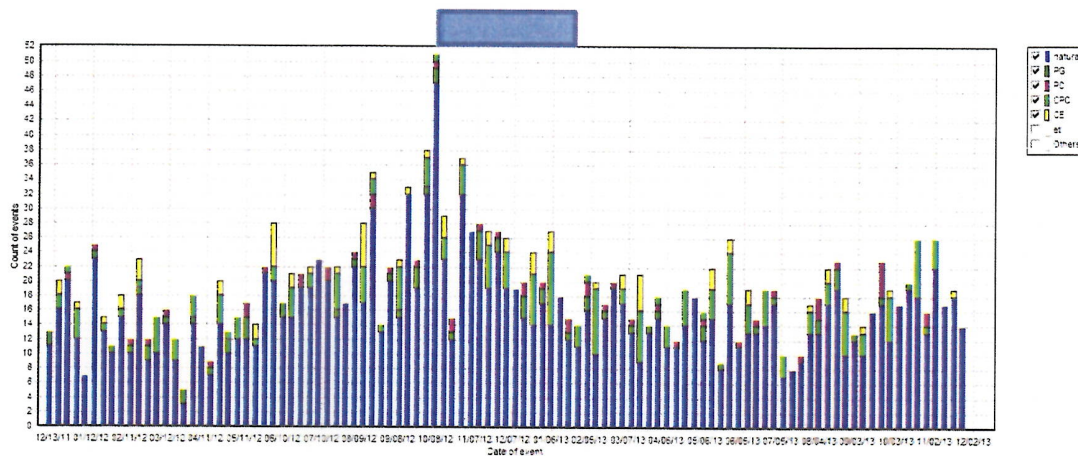


図3の2

図3は、同じ内容を搾乳日数ではなく、単純な経日的に表しています。図3の1が以前の状態で、自然発情授精（青色部分）が極端に少なく、ホルモン処置によって繁殖が支えられていたことがよく理解できます。一方、図3の2は、発情発見マネージメントを変更したあとの状態を示しています。急速に自然発情授精が増加していることがわかります。

発情発見マネージメントを少し前進させるだけで大きな差が生まれてしまうことがわかります。いつの時代も、どんな道具やホルモンを使っても、基本は「(自然)発情を見つけて種を付ける」ことです。基本を忘れて繁殖管理は改善しません。同時に発情を見つけるための活動量を捕捉する道具（万歩計）は、うまく利用するとその投資はあっという間に回収できると思います。目視観察による発情発見に問題を感じている農場があるのでしたら、クラスター事業の補助などを利用しながらの導入も考慮してみてもいかがでしょうか？ 私が検診している農場で好成績を出している農場の多くで、この万歩計発情発見システムが導入されています。